

威風堂々たる古代と絢爛たるルネサンスに挟まれた1000年間

はしばしば「暗黒の中世」といふレッテルを貼られてきた。このような評価を払拭しようと、アメリカの中世史家ハスキングスが、中世文明の輝きを強調した『十二世紀ルネサンス』を刊行してはや100年近くになる。私たちは、中世に対する偏見を脱ぎ捨てることができただろうか。現実は全く逆である。通俗本をめぐりネットを検索すれば、「暗黒の中世」は今でも意気軒高である。

本書を構成する11章は、そうした「暗黒の中世」を体現する言説を余すところなく紹介する。曰く、中世人は大地を平面であると信じていた、曰く風呂にも入らず不潔であった、曰く神学が科学を抑圧していた、曰く子供らが十字軍に参画し哀れにも野垂れ死にした、曰く魔女を次々に火刑に処してい

「暗黒時代」という俗説払拭

ウィンストン・ブラック著



原題—THE MIDDLE AGES
(大貫俊夫監訳、平凡社・3520円)

▼著者は中世科学史・医学史が専門の研究者。中世の薬学と薬草学も研究する。

本書を構成する11章は、そうした「暗黒の中世」を体現する言説を余すところなく紹介する。曰く、中世人は大地を平面であると信じていた、曰く風呂にも入らず不潔であった、曰く神学が科学を抑圧していた、曰く子供らが十字軍に参画し哀れにも野垂れ死にした、曰く魔女を次々に火刑に処してい

た……。合理的思考と理性的判断を称揚する科学技術全盛の現代人であれば、中世とはなんと無知も昧で迷信深い人々で満ち溢れていのだろうかと思ひ込んだら、いかにこれららの言説には根拠がないと著者は断じる、そしてなぜそうしたフィクションが受け入れられたのかを、歴史家の作

人々が信じる俗説を確認し、その根拠を掘り崩す学術研究の成果を披露する。11章にわたりこうした謎解きを繰り返すことで、読者の「暗黒の中世」に対する思い込みを氷解させる。もっと言えば、近代が自分を宣張する対象としていかにして「暗黒の中世」を創造したのかを暴露する。もちろん根拠の

史料に到達したとしても、これが唯一の回答だ、と断言できないこともあります。しかし現在の研究が言えるのはここまでだと線を引き、読者と共に考える姿勢を促すそのあり方こそが学問作法である。

その上で、現代日本の中世受容にまで踏み込む監訳者の後書きに程がいつそう明瞭となる。「暗黒の中世」に限らず、俗説一般に対する解毒作用は確かにあるべし。その一方で、根拠の乏しい俗説がなぜ受け入れられてしまうのかを問う姿勢も、私たちは考えねばならない。情報の選別に時間がかかりネットでのデマが即座に拡散する現代にこそ、相応しい一冊である。

小澤 実

『評』立教大学教授